



1998年度岩見沢分校卒業論文等概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9276

1998年度 岩見沢校学士論文等概要

〈小学校教員養成課程〉

「学校」教育系

教 育 学 今年度は、9月卒業生が1人、3月卒業生が10人、計11人の学士論文が提出された。内訳は教育1研6人、3研4人、4研1人である。4研は障害児教育分野最初の卒業生にふさわしく「聴覚障害児のコミュニケーション」と題した論文で、聴覚障害児と健常児とのコミュニケーションについて、レクリエーション等の非言語的活動法の活用を中心に考察している。3研は「オーストラリアの遠隔教育研究」という統一テーマのもとに、4人が日本で紹介されていない現地英文資料を分担して翻訳紹介し、それぞれ、日本のへき地教育との関係から考察を加えていた。1研の6人は、各人の研究関心に基づく自由なテーマ設定で、「ゆとりと教育」「野外教育の可能性」「少年非行と教育」「学ぶということ」「人と本のかかわりについて」「仮説実験授業に関する一考察」と多彩な卒業研究となったが、それぞれに自分なりの問題意識や思考を大切にしながら資料と格闘しており、また、作成過程では定期的に相互に進行状況を報告しあい共通理解を深めてきた。しかし、研究室の共同研究として指導教官の指導性のもとに統一的テーマを設定するか、学生一人一人の研究関心を尊重して指導教官の担当領域を越えた課題設定も認めるかは、今後とも教官側が頭を悩ます問題である。

教 育 心 理 本年度は、以下の6編の論文が提出された。「女性はなぜ化粧をするのか—化粧の動機と諸要因の関連—」「喫煙行動におけるパーソナリティ特徴の研究」「衝撃的攻撃とパラノイド認知—人はなぜされるのか—」「視覚情報と概念情報が印象形成に及ぼす影響」「『図形記号解読』のセルフカウンセリング学習機会としての可能性の検討」「箱庭作品の変化の意味づけについての—考察—再試行による検討—」いずれも実証的な研究である。また、自己の問題意識を深めた良い研究が多かった。

総 合 教 育 本年度は、以下の論文が提出された。「学校統廃合を決定づける要因は何か—浜益村の事例から—」「小学校における『人物学習』の一考察—歴史教育者協議会の『人物学習論』と実践の分析」「小学校における合唱指導の一考察—自ら表現することができる合唱指導を考える—」「コンピューターネットワークの教育利用について—メディアキッズでの学びから—」「全体的な発達を保障する障害児教育—和光小学校『共同教育』の実践分析—」「乳児の発達に関連した教育の一考察」「『体罰』の概念規定に関する一考察」「児童虐待に関する一考察—教師の手引として—」「正木健雄からだづくり論の批判的検討」「『保健室登校』からみた学校臨床の問題」

「言語」教育系

国 語 古典文学2、近代文学5、国語学2、国語科教育2の計10編が提出された。そのなかで次の2編に意欲的な姿勢がみられた。①「阿部公房—砂の女—」論、文体と作品の理解との関係を通して、『砂の女』に込められたメッセージを説き明かしたものである。特に、論の構成にすぐれた面がある。②「学習活動における言語考察

「情報」のなわ張り理論をもとにして」、学習活動における教師と児童、児童相互による質問や話し合いの記録を語用論の一つであるなわ張り理論をもとに分析し、より望ましい質問や話し合いの在り方を考察したものである。特に、学習における会話分析に示唆を与える。他の論文も独自の視点からの問題意識がうかがわれ、今後の継続的な追究や実践化の試みによる深化が期待できる。

- 書 写**
- ・漢字の特質
～文字の誕生から、殷代、周代、秦代、漢代と字体変遷の歴史をたどりながら漢字の持つ特質について考察。
 - ・王羲之の書と生き方に関する一考察
～時代背景を捉えながら王羲之の生き方と、彼の書が後世に与えた影響について考察。
 - ・顔真卿—その書と生涯—
～顔法といわれる特異な筆法の成立が時代とどう関わるのか。彼の生き方を通して考察。

外 国 語 現代米文学に関するもの3編、アメリカの民話を扱ったもの1編、マザーグースと日本のわらべうたを対照して考察したもの1編、古典的英文学2編、イギリスの児童文学1編、現代アメリカの大衆音楽を通じて今日の米社会を考えたもの1編、英語教育（リズムの習得、単語の学習、日韓の中学校英語テキストを比較しどちらがどの点で教育的効果を挙げているかを考察したもの、詩の翻訳にまつわる問題、色彩を表す英語、日本語の単語の比較研究）などを内容とするもの5編で考察の浅い深いの差は少々あったとはいえ、型にとらわれない独自の考えを自由に発揮したものが多く、従来に見られなかった好ましいものと言えよう。

「社会」教育系

歴 史 日本史関係では、古代史関係で邪馬臺国をとりあげ統一国家形成過程を扱ったもの、幕末～維新の時期に関係して、外国人の記録からみた民衆生活、長州藩が雄藩として活動する諸条件、戦前期の言論統制を「滝川事件」、「天皇機関説事件」を中心に扱ったものがあり、合計4本の卒業論文であった。例年の通り、原史料を読みこんで、史実の諸条件を自ら分析、検討する書き方に遺憾なところがまぬがれなかった。

外国史の分野では、ナポレオン体制の成立がヨーロッパ界に及ぼした影響を主としてイギリス、スペイン、ドイツ、ロシアを取り上げて論じたものと、古代ローマにおける婚姻立法、嬰兒遺棄などの諸問題を取り上げながら女性観の在り方を浮き彫りにしようとした論文の2本であった。教員採用や就職難の深刻化のためもあってか、卒論研究に十分な時間と気力を集中するのが難しくなっているように思われる。

地 理 椿 弘幸：『北海道住宅の外見的特徴と町並み構成に関する研究』
今日の北海道内の住宅は、新技術を駆使した北方型住宅が主流を占め、その屋根形状や断熱構造の発展過程が独特である。こうした北方型住宅を歴史的発展過程から分類し、岩見沢市内において外観からどのタイプの住宅に見えるか、などについて

分析・検討した。

波多野由紀：『北村における農村地域の現状と発展過程に関する研究』

岩見沢市に隣接する北村は、道内でも典型的な農村地帯であると同時に、温泉で有名である。そうした村内における入植・開拓の歴史、土地改良事業の展開、農業者施設の建設と充実、温泉の開発、学校統合政策、などについて、農家への若干の聞き取りも交えて検討した。

恩田和範・梶田浩司：『札幌市における都心部・校外部の地域変化の諸相』

札幌市は、人口180万を超える道内随一に都市である。都市化の概念を若干整理した上で、この札幌市の発展過程と、その校外部について地下鉄豊東線延長開業に伴う豊平区内の変化を、都心部については商業ゾーンの形成とさっぽろ地下街の利用実態、などから明らかにしようと試みた。

大滝志郎：『日高地方における軽種馬生産についての一考察』

日本の軽種馬生産にとって、日高地方の動向は欠かせない。このため、日高地方の軽種馬生産を、その発展の歴史、JRAと地方競馬などの日本の競馬の諸形態、今日の日高地方における軽種馬生産の構造などから明らかにしようとした。同時に、引退馬の学校での飼育について提案を試みた。

法 政

本年の卒業論文は、選挙経験者と未経験者の政治意識の違いを選挙権の有無に着目して検討した「選挙権の有無による政治意識の考察」（橋本岳大）、条例の制定過程における障害者参加の程度を調査・検討した『『北海道福祉のまちづくり条例』の制定過程における障害者の参加』（井田貴之）、の退職の一形態である「合意解約」に関して検討した「労働契約関係の終了事由である「合意解約」に関する一考察」（戸出成記）、知事交際費の情報公開に的を絞って論じた「情報公開条例による交際費情報の公開に関する一考察」（中川敦士）、教師の懲戒権行使と体罰の境界線に焦点を当てた「教師の懲戒権子どもの人権～体罰を例として」（正岡亜紀）、政治意識の違いを投票経験の有無に着目して検討した「投票経験の有無による大学生の政治意識の違いについての考察」（伊東正剛）の6点である。後2者の論文は極めて高水準であった。

社 経

社会学では3本の論文が編まれた。国家の構成要件を論じた1編は、ウェーバーからフーコー、アンダーソンなどを読み解くことで国家の本質、権力、共同幻想等の把握に努めたものであり、その読解力にはすぐれたものがある。ただしテーマを絞り切れず、まとめきれないところがあった。カナダにおける多文化主義を調べた1編は、唯一成文法としての「多文化主義法」をもつカナダに即して、その歴史的背景と前提、内容を克明にフォローしたもので有益であるが、資料の収集・整理にとどまったきらいがあり、たとえばアメリカ合衆国におけるエスニシティ問題との対比があったならば、と惜まれる。高齢者福祉の国際比較を試みた1編は、高齢者問題に焦点をあてて、スウェーデン、イギリス、アメリカ、日本の「福祉の質」を測定しようとしたものであり、一定目的を達しているが、政治過程の分析の不十分さがやや難点である。

経済学において提出された論文は、「株式会社」論と「バブル経済学とその崩壊」の二本であった。前者は、現代日本の特徴である「法人資本主義」論に焦点を当てながら、「所有」論からの考察であった。後者は、バブル経済が如何に形成され、崩壊を迎えるなかでの、不良債権問題、産業構造の在り方を分析したものであった。

両論文とも基礎的レベルはクリアしており、当人にとって今後の「社会」の理解の一助となるであろう。

哲 論 倫理学・東洋思想関係は五編。「源氏物語」にあらわれた仏教思想は原文に基づいて着実に論究し、高い知見も導いている。「老子」の道の考究。「孟子」における人間形成論。「朱子学」理気＝元論等中国古典の中心思想を解明し、現代的意義を考えようとするが、何れも時間・準備不足により押しきれていない。最後の「魔女狩」の由因とあるべき宗教の考察は、教義にとどまらず事実相も検証した。

哲学（西欧領域）は2編。1編は旧約聖書の「ヨブ記」の中心問題、すなわち罪なき人が何故苦しまなくてはならないかを古代ペルシャのサタン問題から現代のドストエフスキーまで辿った力作。尚文献は主として英文。もう1編はルソーの魂の遍歴を主として同時代のフランス・イギリスの哲学者との交流を通して検証したものの。教育系で哲学で卒論を手がけるにふさわしい問題設定だった。

社会科教育 本年度の提出は以下の4編である。「小学校における環境教育～ごみ学習の実践の変遷～」は、環境教育が提唱された背景を、企業型公害・都市生活型公害・地球規模に広がる環境問題の各時期に整理し、それに対応するごみ学習の推移を分析したもので、行政的解決を求める学習から、リサイクルに象徴される個人的解決をめざす学習を経て、社会システムを視野に入れた授業研究がなされていることを明らかにした。「日本におけるビール産業の変遷～ビールの教材化をめざして～」は、生産量の長期統計をふまえた時期区分を試み、近代産業として成立する過程を明らかにしたものである。「北海道の甜菜栽培と製糖業」は、開拓政策の一環として導入された甜菜と製糖業の変遷をもとめたものである。「中学校における選択教科・総合的な学習の時間」は、学習指導要領の文脈に即してそのねらいをとらえようとしたものである。

「自然」教育系

算 数 毎年、四グループに分かれてセミナール形式で演習をしている。宮下教官の海外長期出張のため、数学教育セミは開講されなかった。

解析セミ：数値計算の基礎的な手法を学んだ。とくに線形連立一次方程式の近似解について、ガウス法、ヤコビー法などよく知られた四つの方法について比較し長短を考察した。

代数セミ：平成10年度の代数ゼミナールでは、高木貞治著「初等整数論講義」を四人で読んだ。

幾何セミ：ユークリッドに始まる平面および空間の古典幾何を公理的に厳密に構成し、非ユークリッド幾何についても学んだ。さらに現代的なヒルベルトの方法についても学んだ。

物 理 「焼結と氷球の成長について」

5091 大島 健太 5092 佐々木隆元

5093 新谷 高志 5094 林 徳郎

我々は、多結晶氷の結晶粒の成長・消滅現象と、氷の焼結現象（sintering）との関連性を調べるために、サイズの異なった2個の氷球同士を接触させてその氷球表

面の変化を調べた。結果、今回の実験条件下では、I. 焼結は結晶粒塊が氷球の表面を移動する「表面拡散」という現象によるものであること。II. 環境のエネルギー順位が高いほど焼結は速く進行すること、がわかった。

化 学

以下3件の卒業研究が報告された。

池田 寛之：化学教材のWeb化を通して。

篠原 啓治：化学分野の教育でカルシウムを取り上げる意義について。

仙北山 彩：油脂とエステル。

なお、報告会は授業分析室で行い、全員がコンピュータを用いてプレゼンテーションをした。

生 物

植物分野では「主要野生樹木の季節変化－映像記録と情報化」（三木真由美・山田浩之）、「ツノモおよびボルボックスの培養・成長に関する基礎的研究」（瀬尾太樹）、および「クンショウモの生活環に関する基礎的研究」（西本忠司）の3篇がまとめられた。1篇は利根別自然休養林の植物と植生に関する映像の情報化の第一歩、また、他の2篇は藻類の成長と生活環を栄養や光の色との関連で探求した。

動物分野では、「キイロショウジョウバエ (*Drosophila melanogaster*) poxn突然変異体における雄交尾行動異常の解析」（水上亜紀子）、「不完全変態性昆虫フタホシコオロギ (*Gryllus bimaculatus*) の胚期における感覚神経系の発生」（佐藤秀則）、「不完全変態性昆虫フタホシコオロギ (*Gryllus bimaculatus*) の幼虫脱皮にともなう感覚神経系の発生」（伊藤裕人）の3編がまとめられた。

地 学

1998年度の卒業論文では、西南北海道厚沢部町鶉地域の新第三系及び第四系を研究対象とした。本研究の主要課題は、従来から問題とされてきた館層と鶉層の層序関係の再検討と新第三系及び第四系の層位学・古生物学的研究である。

野外調査はやや綿密さに欠けるが、地域全体の地質構造を把握し、特徴的な生痕化石に基づく層序対比に成功した。また、珪藻化石の分析により館層の地質年代を確定することができた。その結果、鶉層（瀬棚層相当層）はこの地域には存在しないことが判明した。しかし、貝化石や有孔虫化石の解析では、産出層準が館層上部に限定されていたこともあって、古環境変遷を概括的に考察するにとどまった。

野外調査にややデータ不足の感があるが、従来からの問題点（鶉層の層序学位置）を解決できたことは、具体的成果として高く評価できる。

「芸術」教育系

音 楽

98年度は、全部で8本の論文が提出された。内訳は、音楽学に関わるもの1、「音楽記号学における楽譜に対するアプローチ」。音楽科教育の指導法に関するもの2、「子どもの表現を重視する歌唱指導についての一考察」、「小学生音楽科における問題解決的学習法導入の研究」。範囲を広げたもの2、「創造性を育む音楽科教育のための一考察」、「学校生活における、音（音楽）の役割と効果についての一考察」。さらに、より一層の範囲を広げたものが3である。そのテーマは、「マスメディアの子どもに対する音楽の影響についての一考察」、「音楽が胎児・乳幼児に与える影響についての一考察」、「江別市での生涯学習・社会教育における音楽面から見た学校開放制度に関する一考察」である。

いずれの論文も、現代の教育課題、社会の要求にフィットし、その解決に真摯に取り組んでいることが確認できるものであった。

この成果がこれからの活動のベースとなり、より内容の充実が計られることを期待したい。

美術 9名の制作及び論文が提出された。彫塑は3名で流木による人体、塑像と針金によるインスタレーション、セメントブロックによるインスタレーションの3作品とそれぞれに作品論、及びアースワークの教材化論等の論文が付けられた。工芸は2名で、木組みによる立体と椅子、木による動物とあかりの作品が、それぞれフラクタル論とその応用、動物のシンボル化の変遷という論文が提出された。美術教育は2名で芸術療法を美術教育にどう生かせるのかと印象派の点描法のシルクスクリーンへの応用という論文にそれぞれシルクスクリーンによる自然と点描による自画像の作品が付けられた。絵画は2名で油彩による人物画と銅版画による絵巻物的表現の作品、そしてそれぞれに絵画のなかの光についてと西洋と日本の空間表現の比較についての論文が付けられた。卒業制作展は例年どうり岩見沢市民ギャラリーにおいて行われた。

「生活・健康」教育系

体育 今年度は、研究室と学生個人の問題意識を反映した内容のもの10編が提出された。「少年サッカー選手の技術指導に関する研究～特にヘディング動作の修得について」阿部雅紀。「高校生の運動部活動における退部に関する研究」川辺留美。「サッカーにおける技術発達と運動能力、指導者との関わりについての研究」菅野順一。「クラウチングスタートとスタンディングスタートの比較」菅原浩司。「歩行が心拍数と酸素摂取量に与える効果～4種の歩行から～」寺澤美香。「カービングスキーの性能に関する研究」秋山谷悟。「スキー場の利用に関する全国的な傾向と岩見沢市および周辺地域の現状」池川悦子。「野球の走塁におけるスタート方法の研究」藤本和宏。「運動時の呼吸循環反応から見た人工光線の作用について」田尾香。「人工光線の作用機序に関する生理学的基礎研究」片桐いずみ。

技術 機械専攻生（2名）：2名とも、機械の設計と製作を行った。それぞれ、φ10以下の金属棒を切断する小型高速切断機、金属表面を研磨する小型バフ盤である。

電気専攻生（2名）：絶縁液体中の電荷生成機構については電極表面からの電荷注入および液体中の解離・再結合が別々に考えられてきたが、高電界中では両現象が同時に生じていることを想定し、絶縁液体中の過度電気伝導に関するシミュレーションを行った。

情報基礎専攻（3名）：パソコン教室の学生利用の調査・研究を行った。（1名）情報教育を支援するためのファイルサーバー及びプログラムランチャーソフトを開発した。（2名）

家庭科 本年度は以下の7編が提出された。「家庭科における新聞教育の意義および実践」「生活習慣からみた頭髪の意識に関する調査」「女子大学生のカジュアルウェアの嗜好に関する調査－パジャマと冬用ニットについて－」「家庭科教育における献立学習の必要性－実生活に生かせる献立学習を目指して－」「わが国の現代における

少子化の現状と背景」「共生社会に生きる高齢者の自立に関する一考察」「ブラジャー
価格に対する女子大学生の意識に関する基礎的調査」

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

われわれのグループはいつも現在進行型の社会問題にとりくむ学生が多いのであるが今年もその傾向は変わらない。環境問題が2論文。一つは今話題の「外因性内
分泌攪乱物質（環境ホルモン）について」（浅井奈美）。新しい問題なのにデータ
はホームページをアクセスするとあっという間に集まり、時代の変化を感じた。も
う一つは自動車の排気ガスに関するもの。中学生の親の意識を調査（下沢亮一）。
今話題の児童虐待にかんしては歴史的なあとづけをし、現代の虐待の特徴を明らか
にした（伊藤由紀子）。岩見沢校にも留学生が年々増えているが、その医療をめぐ
る実態を調査するとまだまだ不十分な状況であった（阿部伊奈穂）。情報化のなか
で変貌する現代の若者にコミュニケーションの在り方を、自分自身もその若者であ
るとする立場から、それを病理ではなく「進化」であるとした論文はユニークである
（水梨芽久美）。
（分析・古村えり子）

社会教育コース・心理学グループ

中国の障害者福祉制度を中心に検討した「中国における福祉の現状と課題―障害
者の福祉と教育からの文献の検討―」、T A T検査の性別図版を性の要因から検討
した「T A T（主題統覚検査）男性用図版と女性用図版に関する研究」、人に対す
る嫌悪感情を分析した「対人嫌悪の決定因―要因、感情、コーピング間の関連―」、
地下鉄の専用席表示と譲席行動を検討した「譲席行動と高齢者イメージに関する研
究―専用席表示マークの変更にとまなう影響―」、車椅子利用者に対する距離の取
り方を検討した「車椅子利用者への意識がパーソナルスペースに及ぼす影響につ
いて」、留学生の大学施設などに対する意識等を検討した「当校における中国人留
学生の学習環境についての調査」、以上6編が提出された。

社会教育コース・スポーツコミュニケーション分野

今年度は9編の卒業論文が提出された。「F I F Aワールドカップフランス大会
における日本代表のゲーム分析」（澤田憲宜）、「バレーボールのスパイク指導に関
する研究―指導される側の立場から―」（本間綾子）、「クラウチングスタートとス
タANDINGスタートの比較―本学生の場合」（西川 剛）、「歩行が心拍数と酸素
摂取量に与える効果―4種の歩行から―」（目代越子）、「カービングスキーの性能
に関する研究」（野中有理紗）、「スキー場の利用に関する全国的な傾向と岩見沢市
および周辺地域の現状」（岩佐綾子・森谷直樹）、「野球の走塁におけるスタート方
法の研究」（吉川英昭）、「運動時の呼吸循環応答からみた人工光線の作用について」
（宮本宏美）、「人工光線の作用機序に関する生理学的基礎研究」（山村優子）。いず
れの論文も4年間の集大成として高い評価が得られた。

文化人類学研究室

本年度提出の卒業論文は、文化人類学に関連する論文のみではなく、国文学、博
物館学、考古学等の多岐の分野にわたるものであった。タイトルは以下のようなも

のである。「宮沢賢治のイーハトブ論」「サーミのアイデンティティと社会活動における一考察」「ガラス工芸に関する一考察」「続縄文時代における琥珀玉についての一考察」。各論文とも自らが培ってきた興味にもとづくものであり、それぞれが真摯に研究に取り組んでいた。北方少数民族のサーミに関する論稿については、新規の主な資料をインターネットから収集するなど、本校の施設を最大限に利用して作成された。写真資料などの利用も盛んとなり、今後の本研究室の学生による研究動向の変化を予測させる論文が多かった。

社会教育課程地域科学コース・自然科学分野

本年度の自然科学分野関連の卒論は5篇であった。「現在のエネルギーの状況と核関連施設の誘致による地域振興について」(神谷 実)はエネルギー問題と地域振興について、国内外の諸行事から検討を行っている。「オリエントにおける星座の起源及び星に関わる教育について」(照内直美)は星座の起源について、各方面の著述から解明を試みている。「札幌市における地域住民の生活に関する除排雪体勢についての一考察」(東 将友)は札幌市の除排雪施設について、地方自治体と地域住民との協力共同などの現状を分析している。「十二花雪結晶の形態的特徴とその成因について」(表 裕美)は十二花結晶の形態的特徴に着目し、それから新たな十二花生成説を提起している。「石狩と空知の地域における降雪分布特性に関する気候学的研究」(河原正和)は、内陸部における気圧配置などの特徴から両地域における降雪特徴を比較検討している。